＊M0409H000YMACC120709000000472＊

09日付　山城A朝刊通し　◎E・新随想箱
2021年04月07日13時25分46秒　ID=CC120709000000472
PDFゲラ出力　箱組　校正回数＝68　79倍　0×　25行　0

随想やましろ

母と娘の暮らし

門阪　庄三

本来の関心事ではなくとも、後々まで強く記憶に残ることがある。

A子さん、80代半ば。ひと月前に京都市内の病院で手術を2度受けて退院後、娘さん宅に越して来た。初めての訪問時、A子さんは微熱がありしんどそうだったが、こちらから尋ねないと自分の苦痛を話さない人だった。おなかに入った細いチューブが、きれいなパジャマの間から見えた。

2度目の訪問の時も、きれいなパジャマ姿。緑とピンクの色調もそうだが、布地の艶が鮮やかで強く印象に残った。最初は病状とは似つかわしくないとも思えたが、考えてみると、医師の勝手な先入観だと思い直した。

病人らしい服装というものがあるとすれば、それは病室で医療処置を受けるのに適した服装ということになろうか。実際、病衣という言葉もある。だが当時、A子さんの居る場所は病院でなく娘の家で、自分の意思や好みを優先できる。何よりそこでは、A子さんは1人の生活者なのだ。

今でもパジャマのことに気が行くと、彼女や彼女のパジャマ姿を思い出す。思えば、あのパジャマは彼女の好みではなく、娘さんのアイデアだったのではという気もする。横になることが多くなると、病人を思わせる色調の服装ではなく、晴れやかな模様のパジャマの方が良いと考えたのかもしれない。それとも、母娘2人で選んだか。

大事な節目で、母と娘は話し合ってさまざまなことを決めただろう。娘は自身の進学や結婚、子どものお宮参りや七五三の際の決めごとなど、多くの場面で母の助言を取り入れてきた。一方、A子さんは自分のことはさておき、食べるもの、着るものをはじめ全てにおいて、子ども中心の生活を過ごしてきた…。

娘はその時々の母の姿を忘れることはないに違いない。台所で生き生きしていた母、洗濯物をたむ母、華やいだ服装で出掛ける母の残像は心の中でいつまでも色あせず生き続ける。

A子さんを自宅に引き取った娘さんの「お母さん、幸せだった？」との問いに「幸せよ」と答えたと聞いたのは、彼女が亡くなった後の涙の回想の時だった。

（かどさか内科クリニック）